

## びわこ学院大学 令和六年度 学校推薦型選抜（公募推薦）「教養問題」

（注）設問で指示した字数には句読点等も含まれます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ペンギンは、氷雪の上に棲すんでいる。地上には餌になるようなものはない。海に飛び込んで魚などの餌を捕らなければ、飢え死にしてしまう。

しかし、海の中にはオットセイ、トド、シャチなど、ペンギンを捕らえて食べてしまう恐ろしい敵も潜んでいる。海に飛び込んで餌を捕りたいのはやまやまだが、食われてしまうことも恐ろしい。できれば、他のペンギンが海に飛び込んで、安全だということが確認できてから、自分は飛び込みたい。まるで先に飛び込む順番を譲り合っているようなペンギンの可愛らしい仕草の背後には、このようなかわいらしさにはほど遠い理屈があるのである。

しかし、何時までも飛び込まずにとらわっているわけにもいかない。いつかは危険を冒してでも海の中に飛び込まなければ、餌をとれずに死んでしまう。餌がとれるか、それとも食われてしまうのか、避けることのできない不確実性の下で、いつかは決断を下し、飛び込む——海の中に真っ先に飛び込む「最初のペンギン」がいるからこそ、群れ全体にとっての事態が切り開かれるのである。

英語圏では「最初のペンギン (first penguin)」と言えば、勇気を持って新しいことにチャレンジする人のことを指す。そのような概念、それを表現する言葉があるということは、それだけ、不確実な状況下で勇気をもって決断する人が賞賛される文化があることを示している。

未来が見渡せないままに不確実性の海に飛び込むというのは、創造性の発揮において、人間がまさに行なっていることである。創造的な人間は、不確実な状況下で海に飛び込むという「決断」を下すペンギンと、生物の進化の歴史を通してつながっている。不確実性に直面し、それを乗り越えるための脳の感情のシステムを働かしてつながっているのである。

不確実な状況下で判断を下す時、私たちはある決まったルールや方程式に従っているわけではない。不確実な状況下における私たちの直観を支えているのは、私たちの感じる様々な感情のニュアンスである。一見とらえどころがないようにも見え、どんな方程式でも、どんなルールでも書くことのできないように思える感情こそが、不確実な状況の下での私たちの直観を支えているのである。

どの学校に進学するか。専門は何にするか。どの会社に就職するか。それとも自分で事業を興すか。この人と付き合って大丈夫か、結婚してもいいのか。不条理な上司のことを、周囲に訴えかけるべきかどうか。それとも、しばらくは黙ってがまんして様子を見るか——。

今日の昼食を何にするかというような小さな問題から、人生を左右するような大きな問題まで、私たちが人生で直面する（a）殆ど殆どの問題は、確実な答えがわからない不確実なものである。そのような場面で確実な答えだけを求めていたら、かえって判断を誤る。たとえ確実なことが判らなくても、自分の **A** を信じて行動することで道は開ける。

もちろん、その結果、失敗したり、痛い思いをするかもしれない。しかし、それはこの世界に生きている以上仕方がないことである。人間だけでなく、生物は皆不確実な世界の中で生きている。不確実さを（b）徒徒に避けたり、確実な正解があるはずだと思ひこむことの方が、よほど危険である。肉食獣が闊歩かっほしているからといって、何時までも洞穴に隠れていては飢え死にってしまう。

うまく生き延びるためには、不確実さに立ち向かい、乗りこえるための感情の技術を磨く必要がある。そのことは、文明以前の原始時代でも、今日でも変わることはない。

創造することが、もし、確実な前提条件から、すでに確立したルールに従って論理的な演繹えんぎを積み重ねていくことでしかないとしたら、そこには何の新しいものも生み出されるはずはない。（1）コンピュータが基本的に新しいものを生み出せない理由が、まさにここにある。

創造的な人は、未知のものへの好奇心に満ちている。今まで誰も見たことがないようなもの、地上に今まで姿を現したことがないようなものを創り出すことが、創造することの（c）醍醐味たいごみである。

ライト兄弟が最初に飛行に成功した時、まさか鉄の塊が空中に浮くなどと考えていなかった当時の人たちは、飛行を目的まとして

たりにしながら、自分たちの見たものを信じなかったという。飛行を繰り返しているうちに、「どうやら本当に飛んでいるらしい」という噂が立って、やがて新聞でも報じられるようになった。

私たちは、すでに創造されてしまったものについて、まるでそれが太古からずっと存在していたかのように思ってしまうところがある。それが存在することがあまりにも当たり前になってしまつて、かつてはそれがこの地上にはなかったのだ、ということ想像することは難しいと感じてしまう。しかし、創造するということは、まさにその「それがなかった状態」から「それが出現した状態」へのジャンプを経験することなのだ。そのジャンプは、決して確実な基盤からの定まったルールに基づく演繹などではない。創造することは、どこに着地するかも判らずに、未知の世界にジャンプすることに似ているのだ。一瞬先には何が待っているか判らないという、めくるめくような「未来感覚」こそが創造性を支えるのである。

今では、全てのもがお互いに引き合うという「万有引力の法則」は、小学生でも知っているような「常識」になっている。しかし、ニュートンがリンゴの落ちるのを見て万有引力を思いつく前の世界では、そんなことは誰も考えたことがなかったはずである。リンゴに限らず、地上の物体はそれを支えるものがなければ下に落ちる。ニュートン以前の人々は、それ以上深くは考えずに、それは当たり前だと思っていた。一方、月に限らず、天上のものは天上にあるまま落ちてこない。これも当たり前だと思っていた。地上のものは落ちる。天上のものは落ちない。この二つの当たり前の間にどのような関係があるのかを、ニュートン以前の誰も真剣には考えていなかったのである。

地上のものと天上のもの性質が違うのは、それが属している世界が違うんだから当たり前である。そんな当時の常識を、ニュートンは「リンゴが地球に向かって落ちるのならば、月も落ちるはずだ」という視点の転換を通して覆した。その結果、実は月も万有引力によって地球に落ち続けている。ただし、慣性によって落ち切ることができないので円軌道を描くのだ、という全く新しい世界観を創造することができたのである。地上と天上が、一つの数学的秩序の中に結びつけられたのである。ニュートンによる革命がなされてしまった後では、万有引力という考え方を「そんなの」**B**「だよ」と片づけることは簡単である。本当に難しいのは、ニュートンがその革命的なアイデアを思いつく以前の世界を想像し、その世界から、ニュートン以降の世界へのジャンプを思い浮かべてみることである。

誰も万有引力という概念を知らない時代に、一方では地上のリンゴを見て、もう一方では天上の月を見る。その両者を結びつける。この(2)とてつもなく詩的な想像力が、ニュートンの中に突然わき上がってきた瞬間の興奮を思いやる。

もし、その時のくらくらと眩暈がするような感覚を自分のものにできたとすれば、あなたは、少しは創造という行為の中に潜む未知の世界への跳躍を追体験できたことになる。

一度何かが創られてしまった後で、その創造の瞬間を振り返って批評するのは簡単なことである。史上初めて何かを生み出す人は、まさに「**C**」のような不確実性への飛躍を行っている。

(茂木健一郎『創造する脳』PHPエディターズ・グループ)

(注) 闊歩……おおまたにゆつくり歩くこと。

演繹……一般的・普遍的な前提から、より個別的、特殊な結論を得る、論理的推論の方法。

問一 傍線部(a)と(c)の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

(a) 殆ど (b) 徒に (c) 醍醐味

問二 **A**・**B**に当てはまる言葉を文中より抜き出して答えなさい。ただし、**A**は二字、**B**は四字とする。

問三 傍線部(1)「コンピュータが基本的に新しいものを生み出せない理由」は何か。解答欄に従って、文中の表現を用いて答えなさい。

問四 傍線部(2)「とてつもなく詩的な想像力」を具体的に示した表現を文中より三十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問五 **C**に当てはまる十字以内の表現を、文中より抜き出しなさい。